平成 27 年度 NFAD 代表団活動報告書

2015. 12. 21

NPO ネパール治水砂防技術交流会

今年度も、（一財）砂防フロンティア整備推進機構の木村基金からの助成を得て、4 名がネパールとブータンを訪問した。

◎期間；平成 27 年 11 月 28 日～12 月 6 日

◎代表団；

田村公平	NFAD 顧問、元参議院議員
大井英臣	前 NFAD 理事長
森　俊勇	NFAD 事務局長
大田憲明	SFF 事務長

◎活動行程；

11/29	羽田⇒バンコク⇒カトマンズ	・カトマンズ市内の地震による被災状況調査
11/30	カトマンズ⇔バラビセ	・2014.8Jure 地区地すべりにより形成された天然ダムの状況調査（Sindhupalchowk 県、Sunkosi 川右岸）
12/1	カトマンズ⇒ポカラ	・ポカラからバグルンの小中学校に移動し、作文の表彰式（Shree Rudrepipal Higher Secondary School）
12/2	ポカラ⇔カラパニ ポカラ⇒カトマンズ	・2013.10 に土石流災害が発生したセティ川に隣接する小学校に行き、作文の表彰式。（Shree Annapurna Lower Secondary School） ・セティ川の被災地視察 ・ポカラにて NPO 日本ネパール女性教育協会訪問
12/3	カトマンズ⇒パロ	・ブータンのティンブー周辺の視察
12/4	パロ⇒カトマンズ	・ブータンのティンブー周辺の視察
12/5	カトマンズ⇒バンコク⇒羽田	（帰国）

1. 作文コンクール表彰式

途中中断があったものの、2003 年から取り組んできた「土砂災害などの自然災害から自分の命を守るにはどうしたらよいのか？」をテーマとした作文コンクールは、2015 年度もポカラ近郊の 2 校で実施した。

長期専門家が不在となった段階では、一時中断していたが、元駐日大使のマテマ氏の支援を得て再開した。2013 年度は、初めて山形大学（八木教授ほか）とのコラボレーションで実施し、トリプバン大学の学生にも協力してもらい実施することができた。

2015 年度は、トリプバン大学の学生 2 名と、JICA の青年海外協力隊でコミュニティ開発をテーマに Baglung を中心に活動している伊藤隊員にも助力いただき、NFAD カトマンズ支部長の菅沼一夫氏がチーフとなり、2 校で実施した。

1）Shree Rudrepipal Higher Secondary School

ポカラの中心部から車で約 3 時間かかる Baglung の学校に行き、表彰式を実施した。カトマンズから

ポカラへの飛行機が霧のため 3 時間以上出発できず、下校時間の 16 時を過ぎて、ようやく到着したが、校長先生をはじめほとんどの生徒も待っていてくれ、盛大に表彰式を行うことができた。

2）Shree Annapurna Lower Secondary School

この学校は、2012 年のセティ川土石流災害の最大の被災地カラパニを見下ろす高台にある。学校自体は被災しなかったが、家族や親戚を亡くした生徒もおり災害を間近に経験している。被災したつり橋は復旧したが、ホテルやレストランは復旧せず慰霊碑のみが建っていた。この学校でも盛大な表彰式が行われた。

なお、この学校には「セティ川災害現地調査 2013.6.2-6.13」（NFAD/国際砂防協会）の際、多くの情報・資料を提供していただき大変お世話になった経緯があり、今回お礼を述べることができた。また、英文報告書を後日送付することとした。

3）作文コンクールは、2003 年度から JICA プロジェクトの長期専門家等にお世話になって実施してきたが、プロジェクトが終了した段階で一時中断した。その後、元駐日大使のマテマ氏からの助言もあり、NFAD 会員でネパールに在住していた菅沼氏にお願いして再開・継続してきた。しかしながら、作文コンクールは一定の役割を果たしてきているものの、経費面からは持ち出しが多く、また、NFAD カトマンズ支部長の菅沼氏の犠牲的な取り組みによって何とか実施してきたのが実態であった。そのため、今年度でいったん中断し、来年度以降 NFAD として何に取り組むべきなのか再検討することとした。そこで、今回のネパール訪問の機会に、大井前理事長からその旨をマテマ氏に説明して了解を得た。

来年度以降の取組みについては、ネパール人の砂防関係技術者の養成・支援を念頭に置き、弘前大学の桧垣教授を中心に具体的スキームを作成してもらうこととした。

2. 警報機付き雨量計、水位計

コミュニティ早期警報支援ボランティア（VCEW）は**警報機付き簡易雨量計、水位計**の開発・普及を行っているが、ネパールについては（一財）砂防フロンティア整備推進機構の木村基金からの助成を得て 2010 年から 5 回にわたり訪問し、DWIDP 等関係機関に対し技術移転及び新たに改良された機器の供与を行ってきた。今回は、最新の改良雨量計を持参し DWIDP、ICIMOD および Shaplaneer(コミュニティ防災を実施している日本の NGO)に贈呈した。

3. DWIDP（治水砂防局）

DWIDP は、JICA プロジェクト(DPTC/DMSP)から継続して洪水・地すべりに関する調査・対策、研修・啓蒙活動を行っているが、道路局との連携で主要道路の防災も主要な業務（シンズリ道路、プリトビハイウェイ）となっている。加えて最近は、昨年の Jure 地すべり、今年 4 月・5 月の地震など大規模災害への対応が重要な任務となっている。特に今回の震災については JICA 調査及び文科省調査（桧垣・八木教授）が開始され、これらへの参画が検討されているが、DWIDP が十分活動するためには、従来のようなプロジェクトや専門家が不在の中、桧垣・八木教授の協力や木村基金の活用による技術的、資金的支援が望まれる。カウンターパートで唯一残っていた地すべり対策課長の Amatya 氏も来年 6 月で定年退職が予定されていることからもその必要性は高い。

なお、昨年設置された松下先生の記念展示施設は、そのまま、ちゃんと展示されていることを確認した。

4. 義捐金

NFAD の会員からの地震災害関係の義捐金は、6 月の総会の際、お出でいただいた Bhattarai 駐日大使に 200 千円をお渡した。さらに今回、250 千円相当を、DWIDP の Pandey 局長に手渡し、復旧活動等に役立てていただくようにお願いした。

Activity on Essay Contest by NFAD

	Year	School Name	City	Prefecture	Number
1	2003	Shree Saraswoti Secondary School	Thecho	Lalitpur	
2	2004	Shree Saraswoti Secondary School	Thecho	Lalitpur	46
3		Shree Chhampi Devi School	Chhampi	Lalitpur	53
4		Jana Bikash High School	Matatirtha	Kathmandu	28
5	2005	Shree Saraswoti Madhyamik Vidhyalaya	Thecho	Lalitpur	40
6		Shree Chhampi Devi Vidhyalaya	Chhampi	Lalitpur	52
7		Jana Bikash Madhyamik Vidhyalaya	Matatirtha	Kathmandu	38
8	2006	Shree Jana Bikash Secondary School	Matatirtha	Kathmandu	43
9		Shree Chamunda Secondary School	Jorpati	Kathmandu	58
10		Shree Bishnu Devi Shiksya Sadan Secondary School	Satungal	Kathmandu	55
11	2007	Pharping Higher Secondary School	Dakshinkali		37
12		Arunodaya Higher Secondary School	Dakshinkali		43
13		Arniko Higher Secondary School	Bhakapur		47
14		Shree Krishna Higher Secondary School	Nagarkot		35
15	2008	Shree Rastriya Higher Secondary School	Pokhara		57
16		Shree Sukra Raj Higher Secondary School	Pokhara		45
17		Shree Kabilas Secondary School	Kabilas		30
18		Shree Saraswoti Tika Secondary School	Pokhara		53
19		Shree Jana Jagrit Higher Secondary School	Sarangkot		61
	2009~2010	(None)			
20	2011	Shree Chandeshwari Higher Secondary School	Nala	Kavre	
21		Kalika Secondary School	Anaikot	Kavre	
22	2012	Shree Chandeshwari Higher Secondary School	Nala	Kavre	
23		Kalika Secondary School	Anaikot	Kavre	
24	2013	Shree Annapurna Lower Secondary School			
25		Shree Nara Jyoti Higher Secondary School			
26		(Class7～10:Essay, Class5～7:Drawing)			
27	2014	Shree Rudrepipal Higher Secondary School			
28		Shree Tribhuvan Adarsha Higher Secondary School			
29		(Class7～10:Essay, Class4～6:Drawing)			
30	2015	Shree Rudrepipal Higher Secondary School			
31		Shree Annapurna Lower Secondary School			

２０１５作文コンクール優秀作品表彰式

1）Shree Rudrepipal Higher Secondary School (Baglung)

2）Shree Annapurna Lower Secondary School (Annapurna)

故松下先生の顕彰コーナー　　地震で倒壊したタワー

パダンで倒壊した建物　　被災したクマリの館　　修復が始まった建造物

跡形もなく崩れた 16 世紀の建造物、カスタマンダップはカトマンズの語源になった寺院

2014.8 大崩壊を起こし、天然ダムを形成した Jure 地すべり

2013.10 にアンナプルナⅢの岩壁の崩壊の伴い発生した土石流により被災したセティ川カラパニの被災地、慰霊碑が建てられていた。右は、ポカラで立ち寄った NPO 日本ネパール女性教育協会。

<ブータン>

空港にある国王夫妻の写真

パロ空港

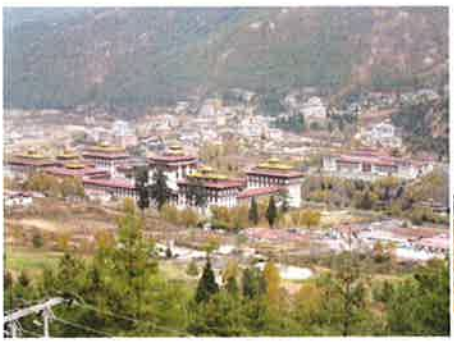
ブータン最古の吊り橋

僧侶の指導で作られた

屋根のある木橋。構造は猿橋と同様

首都ティンブーのメインストリート

市場の様子



王宮

最近作られた巨大な仏像

独特の建物

崖の中腹に作られた寺院

朝日に輝くアンナプルナⅠ（サランコット）

飛行機から見えたエベレスト

Pandey 局長への義捐金の贈呈

ネパール・ブータン訪問メモ

2015年12月28日　大井英臣

■ はじめに

「平成27年度NFAD代表団活動報告書」が別途作成されているが、個人的な感想を含め記録に残したいこともあるので「メモ」を作成した。写真は重複しないよう最小限にとどめた。

今回のネパール・ブータン訪問の目的は次の通り。日程の内11月30日～12月1日は単独行動をさせてもらい、1993年災害の被災地パルンへ行き（カトマンズから南へ2時間余）被災地の現状を視察し当時の関係者と再会した。

NFAD活動

（1）　マテマ元駐日大使表敬。エッセイコンテストへの協力に対する謝金を渡すとともに、来年からのNFADの方針としてエッセイコンテストに代わりDWIDPの震災復旧・防災支援を行う旨説明。

（2）　DWIDP局長と面談。震災被災者への義援金を渡すとともに、NFADの今後の方針（エッセイコンテスト→DWIDPの復旧・防災支援）について説明。

（3）　エッセイコンテスト表彰式への参加。

（4）　カトマンズ市内の震災被災状況、復旧状況の視察。

単独行動

（5）　1993年7月災害関連：被災地の復旧状況視察、個人的に寄付を募り復旧支援を行った学校等の現状視察、及び「被災地の人々」（1998年3月NFAD）でインタビューをした人達との再会。

（6）　2012年5月のセチ川災害関連：被災地の復旧状況視察、及び現地調査（2013年5月NFAD/国際砂防協会）で協力していただいた人達へのお礼。

（7）　簡易雨量計（改良型）の贈呈（ICIMOD、Shaplaneer）。

（8）　JAITIの援助物資運搬に協力（東京→カトマンズ）。

■ 日程

月日	行程	宿泊
11月29日 （日）	00:20羽田→05:20 BKK　TG 661 10:30 BKK→12:45 KTM　TG319 午後　カトマンズ市内の震災状況視察 17:30　日本人関係者懇親会	カトマンズ Himalaya Hotel
11月30日 （月）	【単独行動。他の3人はJure地すべり地を視察したが、昨年視察済みなので、単独でマテマ氏宅を訪問した後パルンへ直行】 8:30-9:30 マテマ元駐日大使宅訪問 12:30-17:00 カトマンズ→パルン→ダマン。途中Shree Jamkeshwari Secondary School （1993年災害の復旧支援を行った学校）訪問	ダマン Everest Panorama Resort
12月1日 （火）	【単独行動、夕刻ポカラでチームに合流】 7:30-11:00 ダマン→カトマンズ。途中Jamkeshwari校の元校長及び1993年災害被災者と再会 14:20 カトマンズ→14:45 ポカラ BHA 609 市内～フェワ湖畔ジョギング	ポカラ Temple Tree Resort & Spa Hotel
12月2日 （水）	5:00-7：00　Sarankotで夜明けのヒマラヤ眺望 8:30-14:00 Shree Annapurna Lower Secondary School訪問（エッセイコンテ	カトマンズ Himalaya Hotel

	スト表彰式参加、及び「セチ川災害現地調査」に関する協力のお礼） セチ川災害被災地復旧状況視察 NPO 日本ネパール女性教育協会訪問 15:10 ポカラ→15:35 カトマンズ BHA 610	
12 月 3 日 （木）	13:25 カトマンズ→15:00 Paro　KB 401 ティンブ及び周辺観光	ティンブ Phuntsho Pelti Hotel
12 月 4 日 （金）	ティンブ及び周辺観光 11:40 Paro→12:25 カトマンズ KB400 JICA 事務所訪問 17:30 ネパール人関係者と懇親会	カトマンズ Himalaya Hotel
12 月 5 日 （土）	13:50 カトマンズ→18:25 BKK TG 320 23:15 BKK　　TG 682	機中泊
12 月 6 日 （日）	→06:55 羽田	

■ 日程の詳細

11 月 29 日

午後、カトマンズ市内の震災状況視察（ダラハラ塔、Durbar Square）。Durbar Square の入口で入場料 10 ドルを支払う。復興資金への寄付。多くの世界遺産建物が被災。それぞれの建物に被災前後の写真と被災状況を記す看板があった。今回の視察はカトマンズ市内のごく一部に限られたが、甚大な被害は地方部における組積造住宅の倒壊や地すべりによる埋没・流失によるものであったといわれる。

ヒマラヤ周辺、中近東、中南米太平洋岸などの地震帯には組積造住宅が多く、それらの耐震化が世界的な防災の課題として指摘され、調査・研究が行われ一部で実施されていたが、十分な成果が上がる前に震災が発生した。今回の震災は、これらの取り組みに貴重なデータを提供するとともに、今後一層拍車をかけるものと思われる。

11 月 30 日

8:30-9:30　マテマ元駐日大使宅訪問。例年通り朝食をいただきながら歓談。

謝礼 400 ドルを手渡した。「Why?」と言われたので、エッセイコンテストなどに対する協力のお礼である旨説明。快く受け取ってくれたが、少々恐縮している様子だった。また、NFAD の方針として、DWIDP はこれから震災の復興・防災が重要な任務になるので来年からはエッセイコンテストを止め、DWIDP の復興・防災活動を支援する方針である旨説明した。マテマ氏は頷きながら聞いていたがよい考えであると賛同してくれた。

その他の主な話題（Ma: マテマ氏）

Ma:　汚職が問題。国会議員を前に演説する機会があったので「皆さんは国会議員なのかそれともビジネスマンなのか」と机を叩きながら糾弾した。省庁では特に道路局、灌漑局、森林省（伐採に絡む利権）が悪い。

大井: 私は昔 Ram Hari Joshi 議員（サルラヒ県出身）と懇意になり、その後ネパールへ出張する度に Joshi 議員宅を訪れ朝食をいただきながら話し合った。粗末な家での質素な朝食は 2 人に相応しい雰囲気だった。清廉潔白さからネパールのガンジーと言われ、そのためかえって政界主流派から疎んじられた

マテマ氏宅にて

と聞いている。

Ma: その通り。Joshi 議員は私が尊敬する政治家。教育大臣、観光大臣を勤めた。

大井: 以前 Joshi 氏から汚職に関する報告書「A Study Report on Causes and Consequences of Corruption in Nepal」をもらった。帰国後送付します。

Ma: 地方の疲弊、中央との格差拡大も問題。特に教育と医療。施設も人材も中央に集中。自分は Deuba 首相の時、大臣に就任するよう勧められ希望する省を聞かれたが断った。暫くして教育改革委員会を設置するので委員長になるよう依頼され、引き受けた。立派な報告書を作成したつもりだが実施されなかった。実施されていれば現在のような状況にはならなかったはずだ。

Ma: インドからの物資輸送がテライでブロックされている。特に燃料不足が深刻。背景にインドがある。今自分はなるべく車を使わず自転車と徒歩で移動している。おかげで健康。その意味ではインドのモディ首相に感謝している（冗談）。

大井: 同じことが私がネパールでいた時もあった。中国との軍事協議にインドが反発しテライで道路を封鎖。そのとき国王が「30 年前は電気などなかった。当時を思い出して窮乏に耐えよう」と国民に訴えていたことを思い出します。

Ma: ブータンでも同じことがあった。ブータンが中国からバスを輸入する協定を締結したとき、インドは反発してブータンへの石油の輸送を止めた。次の選挙でインド派の政権を樹立させ中国との協定を破棄させた。大国の狭間で小国の立場は難しい。ネパール・インドに限らず大国のエゴで紛争が絶えず、世界は平和から遠ざかっている。日本の役割は大きいのではないか。安倍政権をどう思うか。

大井:日本は紛争地域と歴史的な関係が少ないので解決に向け世界をリードすべき立場にあるが、安倍首相にそのような mind はなく、むしろ憎悪が拡大する悪循環を助長する行動をとっている。

Ma: 日本では大勢の人にお世話になった。廣木さん、田畑さん、森さんなどによろしくお伝え下さい。

午後、カトマンズ→パルン→ダマン。

DPTC 時代に通い慣れたトリブバン・ハイウェイを南下。交通量が少なく（特に大型車）、路面状況も良好で快適。ダマン峠はヒマラヤ山脈を眺望する場所で、ホテルやレストランが増えていた。峠の茶屋も懐かしい。

パルンの河川改修

パルンは 1993 年災害の最大の被災地の一つ。土石流氾濫原は被災当時のまま残っているところが多いが、河川改修が行われ（蛇かごによる床固工及び護岸）、道路がよくなり（といっても玉石・砂利道）、野菜の生産がある程度回復しカトマンズへ出荷されていた。フェディガオン市場も賑わっていた。桧垣さんから、パルンの西側に隣接するチサパニはコミュニティ防災に熱心なので訪問するよう勧められていたが、残念ながら時間がなく断念せざるを得なかった。

Tribuban Shree Jamkeshwari Secondary School を訪問。1993 年災害後、香川県の高校の同窓会等から寄付を募り学校、橋等の復旧を支援したが Jamkeshwari 校はその一つ。今回は事前に連絡せず突然の訪問だったが、大歓迎を受けた。校舎正面には、今も寄贈者の名前を記した大きな額が掛かっている。生徒数は当時 200 人だったが 367 人に増え、

Jamkeshwari 校での歓迎

校舎も増築されていた。しかし、今年4月の地震で部分的に被災し仮校舎で授業を行っている。

Everest Panorama Resort ホテルで宿泊。他の宿泊客はドイツ NGO の1組のみ（マレーシアへの移民調査）。標高 2400m、寒さが厳しい。シャワー、洗面、トイレを控え、着替えをせずタオルを首に巻いてベッドに潜り込む。満天の星と夜明けのダウラギリ～アンナプルナ連峰の眺望が素晴らしい。

ダマンからの夜明けの眺望：ダウラギリ（左）、アンナプルナ（右）

12月1日

午前、ダマン→カトマンズ。

途中、1993年災害当時の校長 Indra Lal Pradhan 氏を探しあて懐かしの再会（雑貨店を経営）。「被災地の人々」でインタビューをした Indira Basnet さんにも会うことができた。彼女は今年の地震で被災し、質素だが新しい家に息子（運転手）夫妻と一緒に住んでいる。もう一人の interviewee の Masina Paudel さんは、これまでネパールへ行く度会っていたが、カトマンズへ引っ越し、残念ながら消息不明。

1993 年災害当時の Pradhan 校長（右）、学校建設委員会委員長（左）

午後、カトマンズ→ポカラ。

フェワ湖岸遊歩道をジョギング。遊歩道は船着場から北へ延長約 800m、多くの観光客や市民が散策している。しかし市内や湖岸のレストランなどから汚水が湖に流入している。遊歩道も路面が凸凹で走りにくい。日本の河川や湖は遊歩道・ジョギングコースなどが整備されているが、ポカラはネパール有数の観光地であるだけにそのような湖岸の整備ができればよいと思った。フェワ湖岸マラソン大会が実施されるようになればベストである。

12月2日

早朝、サランコットで夜明けのヒマラヤを眺望。あいにく天気が今一つ。しかし雲海に浮かぶダウラギリ、アンナプルナは幻想的で印象に残る。

午前、Shree Annapurna Lower Secondary School でエッセイコンテスト表彰式に参加。昨年のネパール訪問報告（2014年12月）で「被災地の学校を選定し被災体験とそれに基づく防災の取り組みについて書いてもらう」を提案したが、その提案を受けてこの学校を選定されたのだと思う。コンテストは絵画のみでエッセイはなかったようであるが、絵画にはセチ川土石流災害を思わせるものが多い。校長の巻頭言でセチ川災害についての言及があれば一層良かったと思う。

Annapurna 校は、セチ川災害の最大の被災地 Karapani を眼下に見下ろす高台にある。2013年5月に実施した「セチ川災害現地調査」で、被災当時のビデオ等貴重な資料・情報を提供していただき大変お世話になった。是非お礼をしなければならないとかねがね思っていたが、今回ようやく実現した。調査報告書を後日送付する旨約束した。

Karapani では、吊り橋は復旧、河岸の露天風呂は温泉が湧き村人が憩っていたが、ホテル、レストランなどは再建されず慰霊碑が建っているのみ。復興について Lamsal 校長談：「観光地としての復興については District で検討中と聞いているが詳細は分からない。川を境に村が異なることも復興が進まない原因。温泉については管理組合があり両村代表もメンバー」

復旧した吊り橋

復活した河岸の露天温泉

セチ川災害現地調査の際インタビューをした村の人達にもお礼をすべく土産品を持参したが、あいにく不在で会うことができなかった。今後会う機会はないだろうと思うと心残り。

12 月 3 日

カトマンズ→Paro。念願のブータン訪問。人口約 70 万人、面積は九州位の小国。「開発が及んでいない秘境の国」が唯一の事前のイメージ。Paro 空港（唯一の国際空港）から田舎の風物に見とれながらティンブまで 1 時間余。清涼な空気、川の清流、点在する住宅、風になびく無数の経文旗。市内では王宮（遠望）、郵便局、2 階建て市場、「伝統橋」（木製「片持ち梁」橋）、市内目貫通りなどを巡回。東京の銀座 4 丁目に相当する交差点にも信号はない。街に物乞いは見当たらず、ガイドの説明では貧民街もなく教育費は無料。大気汚染、ごみ、喧噪・・・過密都市カトマンズとは対照的である。

王宮（手前）、国会議事堂（後方）、住宅地の拡大

12 月 4 日

前日に引き続き大仏（高さ 50mは世界一）、Taktshang 僧院（遠望）を見て Paro 空港着。飛行機はヒマラヤ山脈南縁に沿ってカトマンズへ。快晴。ヒマラヤ山脈に聳えるエベレストが素晴らしい。

エベレスト（Paro からカトマンズに向かう機窓から）

JICA 事務所訪問。アポイントメントなしの突然の訪問だったが、田中所員に会っていただいた（所長、次長は不在）。私からネパール訪問の概要を説明するとともに、NSET・東大目黒研の retrofitting 工法、12 月 1 日付の The Himalayan 紙の宮本氏の記事など（宮本氏はハイチ震災（2010）で知り合った国際コンサルタント）、主として震災復興を話題に意見・情報交換。田中氏からは、「復興委員会」はメンバーも決まっているが国会が機能しないため正式に発足できない、NSET は準備が遅れ JICA 調査に参画できなかった、宮本氏からは最初アプローチがあったがその後コンタクトはない、という説明があった。

最後の夜、ネパール人関係者と懇親会。懇親会に先立ち、森 NFAD 事務局長から DWIDP の Pandey 局長に

義援金を手渡すとともに、今後の DWIDP 支援について説明した。
懇親会には様々な人を招待した。DPTC 以来お世話になった人達への感謝とともに、お互いに殆どが初対面であるが今後これを契機に何かにつけて協力してもらいたい、という期待からである。参加者それぞれから自己紹介と仕事の内容の説明をしてもらった。

■ おわりに

ネパールは、政情不安が続き、出発前にも 12 月 20 日からのバンダがアナウンスされていた。「とにかくネパールまで行き可能な範囲で行動する」という方針で出発。結果は、Raju さん、菅沼さんなどのおかげで予定どおり日程を終了することができた。とりわけ燃料不足が深刻。ガソリンスタンドには車が長蛇の列、ガソリンは殆ど手に入らず待機する車は埃まみれ。闇で買って（3 倍の値段）やりくりするしかないそうだ。最後の夜の懇親会の招待者の中には、ガソリン不足で参加できない、と辞退する人もいた。それほど深刻な状況の中 short notice にもかかわらず多くの人が参加し有意義な集まりとなったが、参加者の心情に無頓着ではなかったか、と後になって反省している。混乱は 9 月末から始まったがまだ解決の見通しはない。
11 月 30 日、12 月 1 日には、他の 3 人とは別行動でパルン～ダマンへ行かせてもらった。1993 年災害の激甚災害地の一つで、災害後頻繁に訪れたところである。それから 20 年。今回の訪ネは被災地の現状視察、「被災地の人々」の関係者との再会など、いわばセンチメンタルジャーニーだった。砂防フロンティア木村基金によるネパール支援は今後も継続するであろうが、私の出番は終わりにしなければならないと思っている。
ブータンへの旅行は、予め旅行会社を通じ行程、ホテルなどを決めビザを取得する必要がある。石黒さんのアレンジで有意義な旅ができた。ブータンは、GNP では世界で下位にランクされ経済的に豊かではないはずであるが、西欧文明とは一線を画したブータンらしい良さを感じる。人類総破滅に向かいつつあるような世界情勢（吉田元駐ネパール大使談）の中で、ブータンが GNP ではなく GNH(Gross National Happiness)を誇りを持って推進し、世界の国々がそれに追随するようになってもらいたい、そんな夢のような希望を抱かせる国である。